

子育て支援イベントを通じた保育学生の力量向上

—1・2年生の事後アンケート結果の比較から—

森下嘉昭 難波章人 浅井拓久也*

Enhancing Competence among junior college students for early childhood education teacher through Parenting Support Events: A Comparative Analysis of Post-Event Surveys for First and Second-Year Participants

MORISHITA Yoshiaki NANBA Akito ASAI Takuya

1. はじめに

(1) 研究目的と背景

山口芸術短期大学保育学科では、教育・保育実習を柱としながら、子どもの遊びに直結するような、音楽や造形といった芸術や表現に関わる科目を多数開設し、感性や表現力の豊かな実践力の高い保育者養成を目指している。就職後、即戦力として期待されることが多い学生らが、目の前の子ども一人一人の発達の特性を踏まえて、遊びや生活を通して子どもが主体的に遊び学ぶことができる保育環境を実現するために、養成段階においてもより実践的な力を身につけることができるよう、授業と実践の往還を強く意識した内容を組み込んでいる。そのような中で、子どもと関わる機会を様々な形で重視し、実習とは別に幼児期の子どもとその保護者を対象としたイベントも企画・実施している。

新型コロナウイルス感染症が流行する2020年度以前は、「あつまれ！チビッコ！」シリーズとして、様々な遊びコーナーを設定した「あそびのひろば」、参加した子どもが疑似的に買い物ごっこを楽しむ「お店屋さんごっこ大会」、学生の卒業研究に当たる授業の一環として行われる幼児に向けた舞台表現発表「子ども総合研究発表会」といったイベントを行い¹⁾、学生の学びにおいても大きな成果を上げてきた。これらは、コロナ禍による規模縮小や中止等を経て形を変化させながら、2023年度には「芸短わくわく親子フェス」と題して、回数としては以前と同様に年3回の行事を実施することとなった。

そこで、本稿では、2023年度に大きくリニューアルし実施されたイベントの中から、7月に実施された「あそびのひろば」(幼児向け各種遊びコーナーとお店屋さんごっこの融合したイベント)に参加した学生がどのような学びを得ているか、1年生と2年生を比較することで、その成果と課題を明らかにし、今後の授業や教育課程の改善の示唆を得ることを目的とする。なお本稿においては、イベントの実践・指導及びアンケートデータ収集、執筆を森下、難波で担当し、アンケート分析及び執筆を浅井が担当した。

* 鎌倉女子大学

(2) 2023年度の「あそびのひろば」の概要

2023年度において、「あそびのひろば」は保育学科1年生と2年生それぞれが、同日に同会場で実施した。1年生は「表現の指導法（造形Ⅰ）」(1年前期開講)の授業の一環として、領域「表現」にもとづき、遊びの場面において子どもが主体的に素材や用具とかかわりながらどのように表現するか、発達を踏まえて理解を深めていくとともに、主に環境の作り方や子どもとのかかわり方について、準備やイベント当日の遊びの観察を通して、初歩的な留意点を学ぶことを目的としている。また、そのプロセスにおいて素材・用具の特性を理解することも、ねらいのひとつとなっている。2年生は「保育内容の理解と方法・造形Ⅱ」(2年前期開講)の授業の一環として、こちらも領域「表現」の視点から、子どもの経験や様々な表現活動と造形表現とを結びつける遊びを題材として取り上げ、「あそびのひろば」を通して、様々な造形素材の特徴や活用方法、子どもの発達（興味や関心）について学ぶとともに、コミュニケーション能力を養うことをねらいとしている。

それぞれ、準備期間と具体的な内容については、以下の表1のとおりである。

表1 「あそびのひろば」準備・役割分担表

学年	クラス	準備期間	準備役割	開催当日（7/22）役割
1年生	A	7/3～7/21	新聞紙プールコーナー お絵描きコーナー	新聞紙プールコーナー、会場受付
	B			お絵描きコーナー、誘導
	C		段ボールハウスコーナー 紙コップ遊びコーナー	段ボールハウスコーナー、警備（会場内外）
	D			紙コップ遊びコーナー、駐車場
2年生	A	5/31～7/21	的当てゲーム、輪投げ アイスクリーム屋さん、おにぎり屋さん	
	B			
	C		牛乳パックのお花屋さん、写真館、福笑いあそび、 カラフルメガネを作ろう！	
	D		キャラクターをゲットしよう！、アイス作り、ドーナツ輪投げ ガチャガチャあそび！、クラゲに入って写真を撮ろう！	



図1 会場全景



図2 お絵描きコーナー



図3 紙コップ遊びコーナー



図4 アイスクリーム屋さん



図5 お花屋さん



図6 おにぎり屋さん

また、7月22日(土)10:00~12:00実施の当日の来場者は220人(学生・教職員を含まない)であった。

2. 研究方法

(1) 調査概要

調査対象：保育学科学生 1年生：75人中48人 回収率64%
2年生：70人中68人 回収率97%

調査期間：2023(令和5)年10月2日~10月9日(1年生)
2023(令和5)年7月25日~7月28日(2年生)

調査内容：質問紙によるアンケート調査

- ① あなたがグループのなかで果たした役割とはどのような役割ですか(記述)
- ② 準備の段階で工夫したことは何ですか(記述)
- ③ 準備をしていくなかで、保育者として必要な力としてどのような力が身につきましたか(記述)
- ④ 子どもたちの姿から学んだことは何ですか(記述)
- ⑤ 次も参加する場合、どのような点を改善したいですか(記述)

(2) 分析方法：

質問項目の①～⑤について、KH Coder を用いた計量分析を行った。KH Coder とは、記述式等で得られた言葉について頻出度やある属性に特徴的な言葉を抽出するための分析ソフトである。分析する前提として、同じ意味の言葉は統一した。一例をあげると、制作は「製作」、ダンボールは「段ボール」のように記述した。以上のデータ整備と、本研究の目的が1年生と2年生の比較を通して学びの状態を確認することから、1年生と2年生を比較するかたちで共起ネットワーク図を抽出した。

(3) 倫理的配慮

調査対象者には、本研究の目的、回答は学術的な研究でのみ使用すること、回答の内容と成績は関係がないこと、回答は一定の期間を経て適切に破棄することを伝えた。回答の提出をもって同意を得たとした。

3. 結果と考察

(1) 質問①について

質問紙の①の回答の頻出語から描いた共起ネットワーク（図7）及び1年生と2年生の特徴語を抽出し集計した結果（表2）は、以下の通りである。

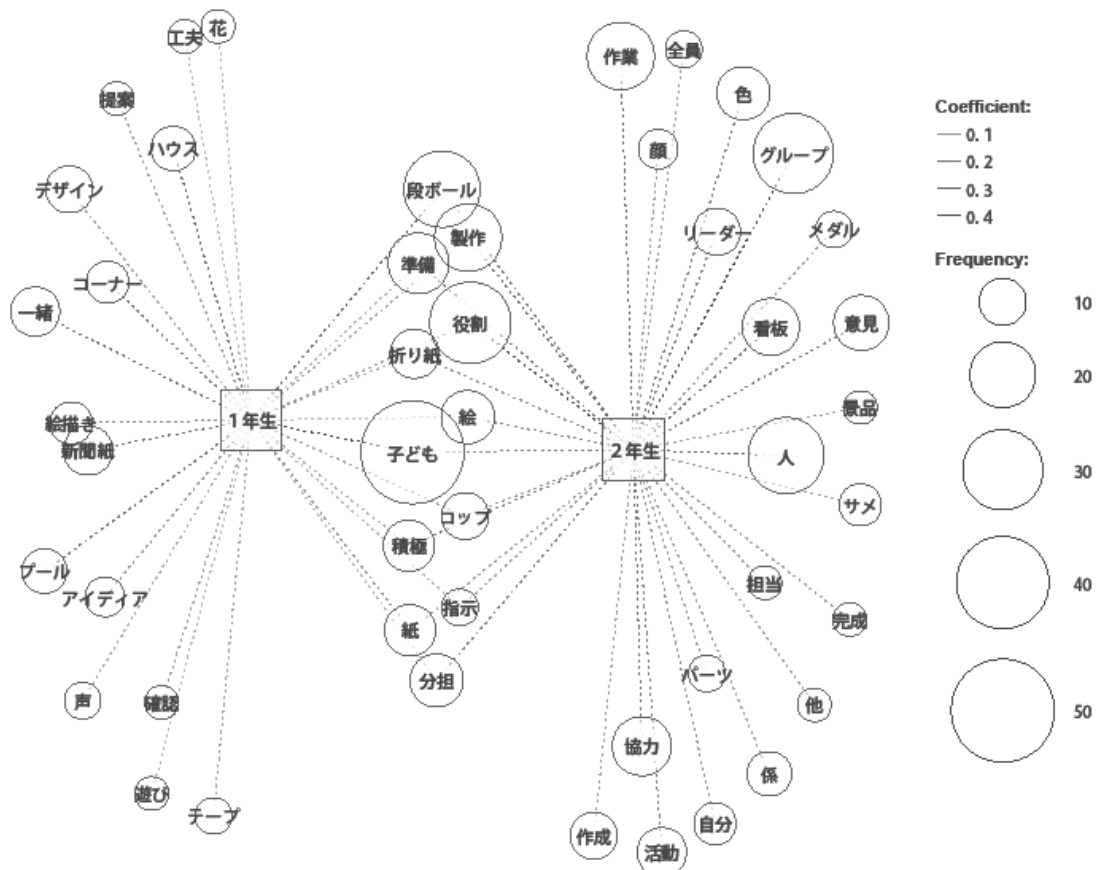


図7 「質問①あなたがグループのなかで果たした役割とはどのような役割ですか」の共起ネットワーク図

表2 「質問①あなたがグループのなかで果たした役割とはどのような役割ですか」の特徴語

1年生		2年生	
子ども	.426	グループ	.382
ハウス	.214	役割	.315
段ボール	.200	作業	.221
プール	.191	人	.221
新聞紙	.182	看板	.206
一緒	.178	協力	.188
コーナー	.167	製作	.183
絵描き	.143	意見	.162
アイデア	.089	活動	.162
紙	.085	色	.162

図の真ん中付近に配置されている言葉は、1、2年生共通の頻出語である。また、「1年生」「2年生」の左右の枠付近に配置されているのが、各学年の特徴的な言葉である。共通する頻出語を見ると、「段ボール」「折り紙」「コップ」「紙」といった比較的手に入りやすい素材を使って何らかのものを製作して準備した、あるいは製作遊びができるように準備した、という具体的な物や場を準備する役割という面で自身の役割を認識していた学生と、「役割」「分担」「指示」といった準備や当日におけるグループワークにおいて果たした役割を強く意識していた学生とがいることが分かる。このイベントは、各学年いずれも造形にかかわる授業であることから、物や場に関する意識が両学年とも強いのは納得の結果であろう。一方で、イベントに向けてはグループワークで活動を進めていくことから、組織・集団の中での自分の役割を強く意識しているということも分かった。各学年の特徴語を見ていくと、1年生においては「アイデア」という言葉からも分かるように、グループ内の一部の学生が「自分はアイデアを出した」という部分でグループ内での役割意識が見て取れるが、多くの学生は準備したコーナーのことについての記述や、当日に子どもと「一緒」に遊ぶ役割であったという記述が多くあった。グループワークでの役割意識は、「グループ」「役割」「協力」「意見」など、特に2年生にその傾向が強く表れている。これまでの実習をはじめとしたさまざまな現場経験から、保育はチームワークであることを理解しており、集団や組織の中で自分がどのような役割を担うべきなのかを意識して取り組んでいたことが分かった。

(2) 質問②について

質問紙の②の回答の頻出語から描いた共起ネットワーク（図8）及び1年生と2年生の特徴語を抽出し集計した結果（表3）は、以下の通りである。

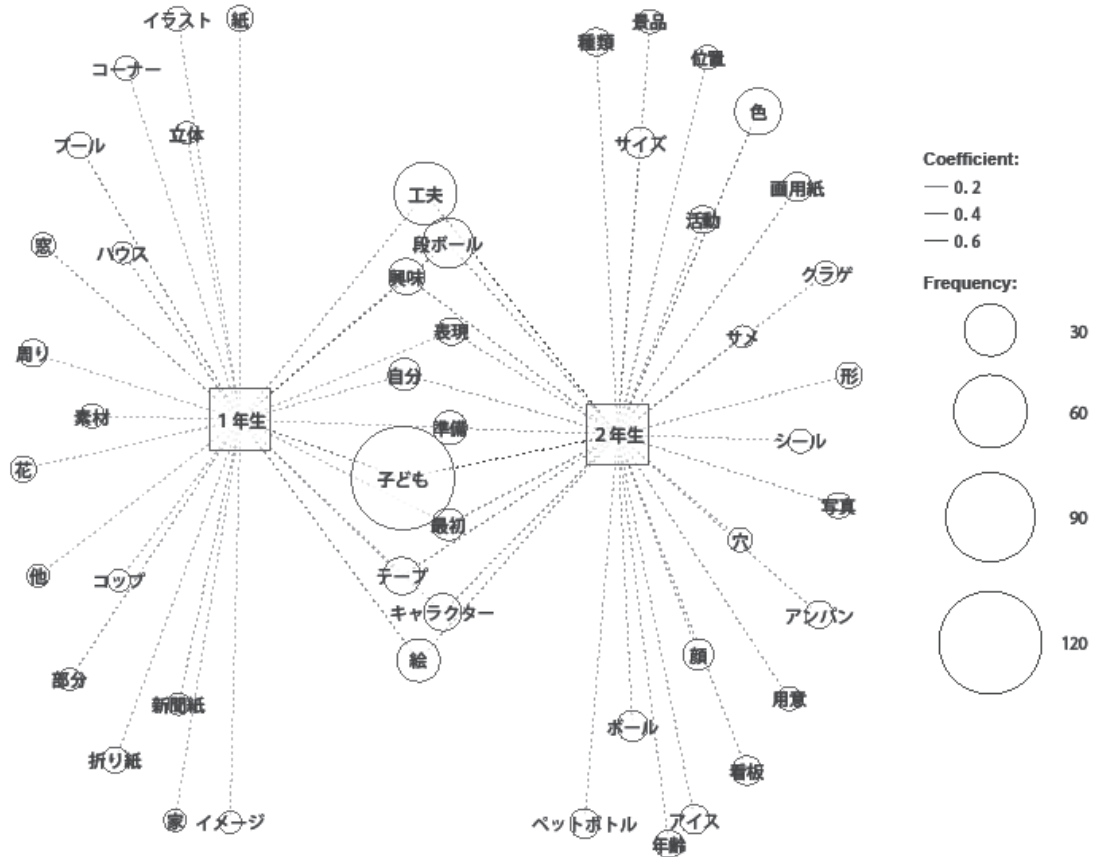


図8 「質問②準備の段階で工夫したことは何ですか」の共起ネットワーク図

表3 「質問②準備の段階で工夫したことは何ですか」の特徴語

1年生		2年生	
段ボール	.264	子ども	.641
プール	.167	工夫	.460
絵	.157	色	.217
ハウス	.119	テープ	.169
窓	.116	興味	.139
仕掛け	.095	サイズ	.132
新聞紙	.093	キャラクター	.130
部分	.093	最初	.130
囲い	.071	準備	.129
電車	.071	ボール	.118

いずれの学年も、「子ども」が「興味」を持てるように「工夫」したということが、共通する頻出語からも分かるが、その他は、各コーナー特有の工夫内容に分散しているようである。1年生

の多くは、空間を広く使う素材遊びコーナーを主に担当したが、記述に表れている特徴語からは、準備段階において、場の作り方や準備する素材の内容、量（数・大きさなど）について、1年生前期のこの時期にはまだ自覚的ではないことが分かる。回答の原文を確認すると「安全」を意識している学生もあったが、数としてはわずかであった。保育は環境を通して行われ、保育者は、子どもとともに遊びや生活の環境を構成するという視点から考えれば、今後これらの視点を意識化していく必要があるだろう。段ボールハウスや新聞紙プールの「囲い」など、場を作るために造形物を製作して準備した学生については、「窓」「仕掛け」「電車」など、自身の具体的な工夫の視点がイメージしやすく記述によく表れているが、やはり担当部署の特有の工夫についての記述が多くなっている。一方で2年生は、どのような内容を担当したとしても意識をして工夫するべき「色」「サイズ」「位置」「形」といった「環境を作るための共通の視点」を感じさせる語が出てきている。また、図の方を確認すると「年齢」という語が出現していることから、子どもの興味や関心を考えて工夫するうえで、子どもの「年齢」や発達段階を踏まえて考えるという力が身につくことが分かった。

(3) 質問③について

質問紙の③の回答の頻出語から描いた共起ネットワーク（図9）及び1年生と2年生の特徴語を抽出し集計した結果（表4）は、以下の通りである。

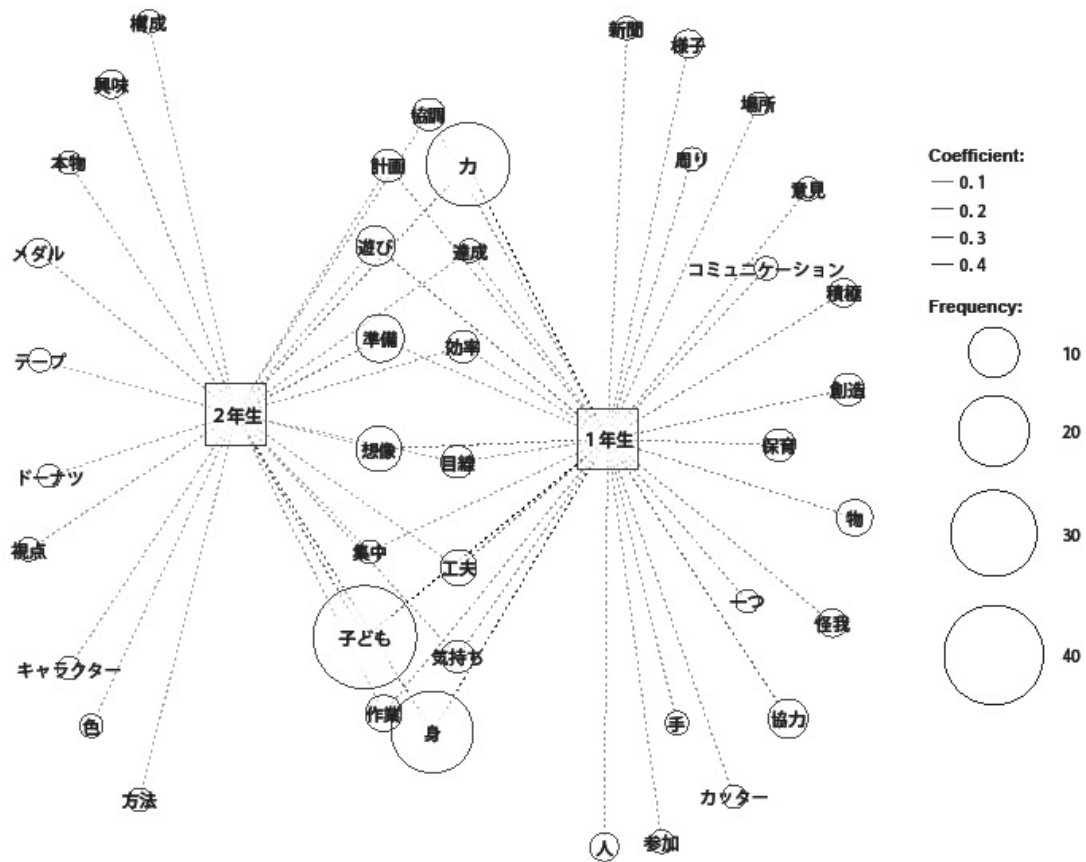


図9 「質問③準備をしていくなかで、保育者として必要な力としてどのような力が身につきましたか」の共起ネットワーク図

表4 「③準備をしていくなかで、保育者として必要な力としてどのような力が身につきましたか」の特徴語

	1年生		2年生
子ども	.444	準備	.101
力	.347	興味	.044
身	.241	効率	.044
想像	.163	ドーナツ	.029
協力	.119	メダル	.029
創造	.095	視点	.029
保育	.095	方法	.029
工夫	.093	お手本	.015
遊び	.093	イメージ	.015
人	.071	カプセル	.015

各学年ともに、グループで「協力」して「計画」的「効率」的に進めることや、子どもの「遊び」を「想像」して準備する力が身についたと回答している学生が多い。少なくとも、そういったことが意識化され、必要性が実感されたということであろう。学年ごとに見ると、その中でも、1年生は「子ども」の「遊び」を「想像」して「工夫」することやグループで「協力」することなどの視点や取り組みの力が特に意識されたようである。それに対して2年生は、「ドーナツ」や「メダル」「カプセル」といった極めて個別具体的な内容の回答が上位に来ている。この項目の回答については、質問②の回答とは逆に、1年生は「視点」や「取り組み」についての回答が多く、2年生は自身が担当した内容にかかわる具体的な回答が多いことが特徴である。このことは、まだ入学した年の前期にあたる1年生では、各授業においても保育に向かう前提となる考え方等を学んでいる段階であること、入学後のメンバーでのグループワーク経験が少ない等の理由から、視点や取り組みの方に意識が向いたということが考えられる。一方で2年生は、こういった前提となる考え方は既に1年間学んできており、グループワークや実習も経験している。その上で『あそびのひろば』を通して、子どもの発達（興味や関心）について学ぶ」というねらいに基づき、授業内において、各グループで考えた遊びのコーナーが子どもにとって興味・関心がどこにどれだけあるのかを繰り返し想像しながら取り組むようにしてきた。そうしたことから、子どもの視点をより具体的に考えたり、想像したりすることが身についたと考えられる。

(4) 質問④について

質問紙の④の回答の頻出語から描いた共起ネットワーク（図10）及び1年生と2年生の特徴語を抽出し集計した結果（表5）は、以下の通りである。

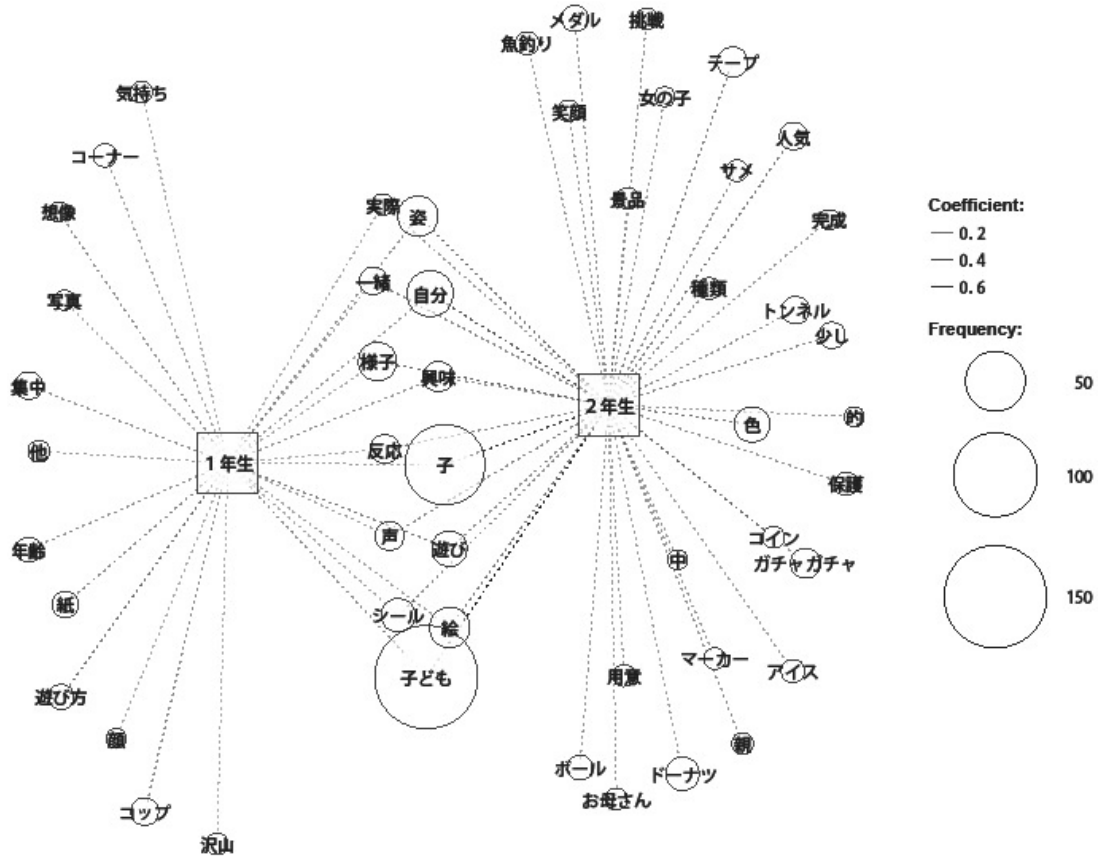


図10 「質問④子どもたちの姿から学んだことは何ですか」の共起ネットワーク図

表5 「④子どもたちの姿から学んだことは何ですか」の特徴語

1年生		2年生	
遊び方	.191	子ども	.718
遊び	.140	子	.472
紙	.114	自分	.306
コップ	.111	様子	.232
プール	.095	姿	.192
新聞紙	.095	色	.177
想像	.093	絵	.157
年齢	.089	テープ	.147
集中	.087	人気	.147
表現	.070	少し	.118

1年生においては、場を用意しての素材遊び、コーナー遊びが主な担当であったため、ただの素材であっても「集中」して遊ぶ子どもの「姿」や、素材から子ども自身が「想像」を広げたり、遊びを考えたりすることでさまざまに「表現」していることに着目した記述が多く、素材をきっかけとした子どもの「遊び」や「遊び方」の豊かさに驚くような記述が多くあった。また、準備の段階についての質問項目では出てきていなかったが、この段階で子どもの「年齢」による「遊び方」の違いに着目している回答もあり、実習経験がまだ乏しい1年生であっても、日ごろの授業とこのような行事の往還の中で、知識・理論と実践が結びついていっていることも分かった。一方で2年生は、どのような内容や工夫に「人気」が集まっていたか、どのような場面で子どもの「笑顔」が見られたかなど、「子ども」の「興味」の在りかをより具体的に捉えようとした記述が特徴的であった。このことは、(3)でも述べたが、子どもにとっての興味・関心の在りかを授業の中で具体的に繰り返し想像しながら取り組んだ結果であり、また、子どもにとって面白さはどこにあるのかをグループで話し合いながら準備したことが、実践において子どもを見る視点にもつながっていることが示唆される。また、子どもと保護者とのかわりに目を向けるような記述もあった。実習等ではなかなか触れることのできない親子の姿を観察することで、子どもそのものだけでなく、その生活や育ちの基盤ともいえる家族とのかわりといった、より奥行きのある子どもの捉え方が行事を通して意識化されつつあることも分かった。

(5) 質問⑤について

質問紙の⑤の回答の頻出語から描いた共起ネットワーク（図11）及び1年生と2年生の特徴語を抽出し集計した結果（表6）は、以下の通りである。

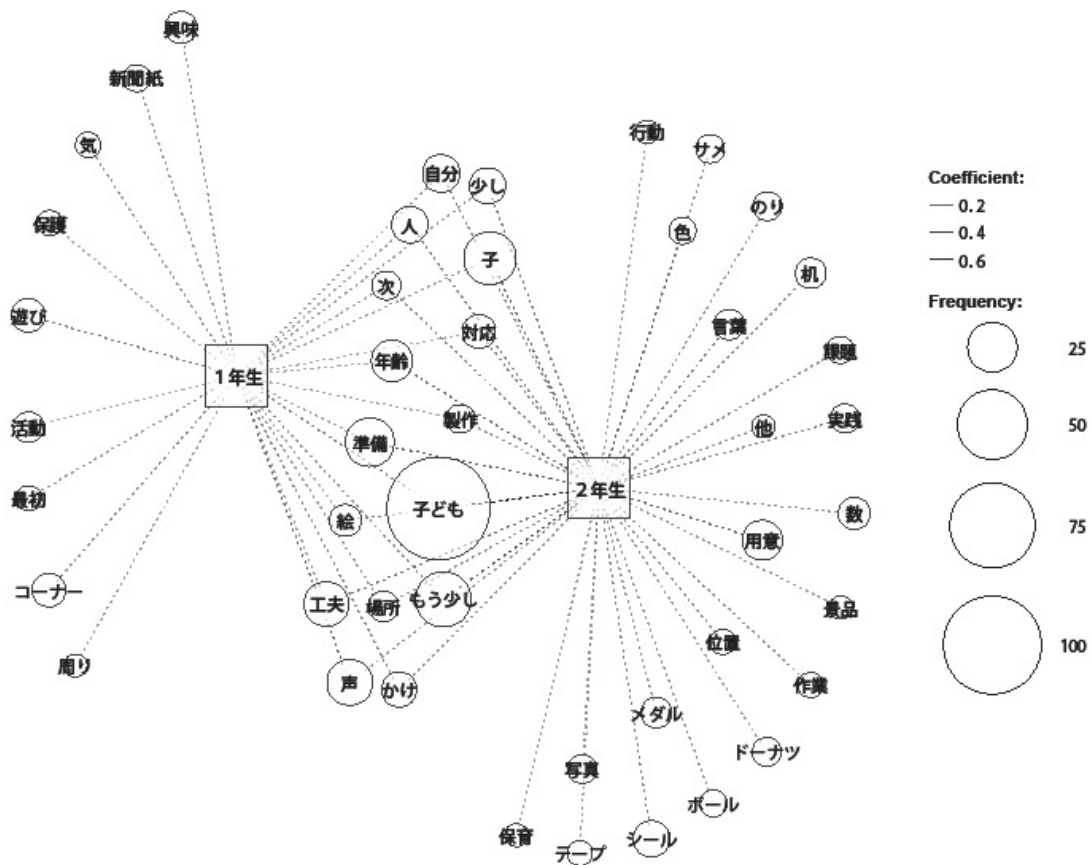


図11 「質問⑤次も参加する場合、どのような点を改善したいですか」の共起ネットワーク図

表6 「⑤次も参加する場合、どのような点を改善したいですか」の特徴語

1年生		2年生	
声	.192	子ども	.628
遊び	.130	もう少し	.274
積極	.095	準備	.243
コーナー	.087	用意	.206
興味	.087	子	.183
プール	.071	年齢	.174
改善	.071	工夫	.169
新聞紙	.070	少し	.141
気	.067	シール	.118
最初	.067	言葉	.118

この項目では、いずれの学年も今回の実践をもとに次につながる改善点を見出していたが、学年によってその傾向は明らかに異なっている。1年生は、「声」「積極」などの語が上位に挙がっていることから分かるように、主に当日の子どもとのかかわりについて振り返る記述が多かった。素材遊びやコーナー遊びを担当したため、基本的には子どもの主体性を尊重しながら遊びをサポートするスタンスを前提としていたが、やはり実習経験が乏しいがゆえに、こういったタイミングでどのように声をかければよいか戸惑う学生もいた。また、コーナーの内容によっては、子どもが遊び始めるきっかけとして、何らかの声掛けがあった方がスムーズに遊びに参加できることに気が付いた学生もあり、子どもに対する直接的な援助において、次回はもっと「積極」的にかかわりたいという意見が多かった。それに対して2年生は、「準備」「用意」といった事前準備にかかわることの改善点や「年齢」を踏まえた「工夫」のこと、声かけの際にどのような「言葉」を選ぶかといったことについての気づきが多かったようである。1年生と比べても、2年生はより具体性をもって改善点を認識していることが分かった。

4. まとめと今後の課題

ここまで、「あそびのひろば」を通しての学生の学びについて、アンケートの回答の比較を中心として整理してきた。各学年のねらいと照らし合わせて、結果をまとめると、1年生は、準備段階で素材を加工するなどの工程にかかわることで、素材の持つ具体的な特徴に触れることとなるため、「工夫や仕掛けを作る」という点においてはある程度素材の特徴を踏まえた学びがあること、子どもの遊びを想像しながら工夫を考えることで、経験が少ないながらも「自分がやってみよう」ではなく「自分が準備しているものに対して、子どもはどうかかわるだろうか」という視点を持つことが分かった。また、イベント当日に参加することで、子どもが素材に自らかかわって遊ぶ場合に遊びがどのように展開するのかという具体的な姿を知ることができ、その豊かさを発見することにつながっており、保育者としてそこにどのようにかかわっていくかという点において、自分なりに考えようとする姿勢が生まれることも分かった。課題としては、環境の作り方や準備する素材の内容、量（数・大きさなど）、子どもの年齢を踏まえた工夫という点については、まだ意識が低いということが分かった。2年生でも、準備段階において素材の特徴を考えながら、子どもが興味をもてるように工夫しようとしているが、ここで子どもの年齢を踏まえて、かなり具体的に活用方法を考えていることから、イベント当日には、より具体的な子どもの姿や親子のかかわりに目を向けており、改善点についても、いかに準備をするか、どのような言葉で

声掛けをするか、といった具体的なところまで意識が向いていることが分かった。一方で2年生の課題としては、想定した以上に参加者が多かったため、学生の援助によって、子どもを待たせずにスムーズに遊びへ誘導することが必要であった。そうした遊びの時間や製作物の数といった場や物的環境を工夫するなど、子どもの様子を観察しながら臨機応変に変えていく力が求められる。そうした課題への気づきがあったことが分かった。また、何度も遊びにくる子どもたちへの製作物が足りなくなり、急遽材料を調達するなどの対応に追われた。また、多くの子どもが繰り返し遊ぶであろうことは想定していたものの、事前の製作物の強度が足りなかったことなどの記述もあった。

以上のことから、子育て世帯の親子を対象としたイベントを実施し、学生が準備・運営にかかわることで、保育における造形表現にかかわる力が総合的に身につけていること、また、学生の学びの段階に応じて、日ごろの学習や実習等の経験で身につけた力を発揮することで、その確認や向上が期待できることが分かった。一方で、1年生においては、振り返りの視点としては、まだ具体性に欠けていること、2年生においては、反省が具体的になるにつれて、大きな視点での回答が減ってきていることが分かった。常にバランスよく、全体と個、大きな視点と具体的な出来事を照らし合わせながら実践を振り返ることが必要であろう。また、次年度に向けて1年生のみに実施したアンケート項目からは、概ねイベントへの満足感が高いことと合わせて、当然のことではあるが、多くの人数がかかわるイベントを実施する際には、教員側のしっかりとした事前準備と学生への事前の周知の必要性が明らかとなり、次年度以降の実施に向けての課題のひとつともなった。²⁾

〈注・引用文献〉

- 1) 上村有平、森下嘉昭：保育者養成短期大学における子育て支援イベントの意義と可能性—参加保護者・学生のアンケート分析から— 山口芸術短期大学研究紀要 56 巻 109-117. (2024)
- 2) 今回は、次年度に向けて、1年生の質問紙のみに以下の項目を入れ、回答を集計した。
 - ⑥ イベントに参加した満足度を回答してください（「まったく満足していない」「あまり満足していない」「やや満足している」「とても満足している」の4件法）
 - ⑦ 次年度の参加希望度を回答してください（「まったく参加したくない」「あまり参加したくない」「やや参加したい」「とても参加したい」の4件法）

上記項目のうち、まず質問紙の「⑥イベントに参加した満足度を回答してください」の回答については、「とても満足している」が29（60.4%）、「やや満足している」が9（18.8%）で、合わせて38（79.2%）、「あまり満足していない」が1（2.1%）、未記入（当日不参加）が9（18.8%）であった。「とても満足している」については記述が残されており、イベントの規模がある程度大きかったことや、その中で子どもが楽しんでいる姿を捉えたことでの自己効力感などから、満足を感じていたことがうかがえた。また、不参加学生も記述を残しており、「準備からとても満足」というように、イベントに向かうプロセスの中でポジティブな学びや感情を得ることができていた様子も分かった。一方で「あまり満足していない」という回答1（2.1%）については「当日までどのような動きか分からない。暑かった。」との記述があった。この不満に関しては、教員側の準備時間及び連携の不足が考えられる。年度途中で急遽行事を実施することが決まり、教員、学生共に短い期間で準備を進めていく必要があった。当日の動きに関しては、担当教員間で大まかな集合時間や終了時間は協議していたものの、細かな連携はできていなかった。結果として、学生に当日スケジュールを周知することができたのは当日朝ということになった。2年間という短い期間で免許資格を取って卒業することを目指す短期大学生は、忙しい毎日を送っているため、直前まで予定が立たないということへの不安が、不満として現れたことが考えられる。また、7月という日程についても、行事決定が年度途中であったという経緯から、実施可能な日にちが限られており、夏の暑い時期に行われることとなったことが理由となっている。

質問紙の「⑦次年度の参加希望度を回答してください」の回答については、「とても参加したい」が26（54.2%）、「やや参加したい」が19（39.6%）で、合わせて45（93.8%）が肯定的な回答であった。一方で「あまり参加したくない」が2（4.2%）、未記入が1（2.1%）となった。質問⑦においても記述があり、「とても参加したい」では、「来年も学校の課題を無理なくできる終わらせられる範囲で、保護者から凄いと

思ってもらえるものを作りたい。」とあり、他の授業課題との兼ね合いを意識しながらも、ある程度の内容・質をクリアしていきたいという意欲を感じさせる学生もいた。このことは行事というものがある学生にとっては意欲を喚起することに関係している可能性を示唆するものである。ただし、「あまり参加したくない」にも1名記述があり、「準備時間を授業中に十分に確保すること。休日に行うのであればどこかで振替休日のようなものがあるのであれば参加したいが空きコマや休日を潰してこのイベントを行うのは負担が大きすぎて辛かったです。」とあった。この回答からは、ただ「きつい」「辛い」というネガティブなものではなく、ある程度の内容・質をクリアしていくためには、時間をしっかり確保してほしいという学生の思いが感じられる。

全体としては、概ね肯定的な回答を得ており、イベントの満足度は、このイベントを通じての学びがポジティブなものとして学生の中に残ることと関係してくると考えれば、概ね良い印象で終わっていることは良い結果であった。ただし、いずれの項目においても、今回学生の回答に記されていた不満は、教員側の準備不足によるところが大きい。これらのことから、多くの人数が関わる行事において、学生だけでなく教員側も計画的に進めていく必要がある。